成人祝福礼拝　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2014年1月１２日

**説教題「人はみな神に生きる」**

新約聖書　ルカによる福音書第２０章２７－４０節

復活ということはないと言い張っていたサドカイ人のある者たちが、イエスに近寄ってきて質問した、

「先生、モーセは、わたしたちのためにこう書いています、『もしある人の兄が妻をめとり、子がなくて死んだなら、弟はこの女をめとって、兄のために子をもうけねばならない』。

ところで、ここに七人の兄弟がいました。長男は妻をめとりましたが、子がなくて死に、 そして次男、三男と、次々に、その女をめとり、七人とも同様に、子をもうけずに死にました。 のちに、その女も死にました。さて、復活の時には、この女は七人のうち、だれの妻になるのですか。七人とも彼女を妻にしたのですが」。

イエスは彼らに言われた、

「この世の子らは、めとったり、とついだりするが、かの世にはいって死人からの復活にあずかるにふさわしい者たちは、めとったり、とついだりすることはない。彼らは天使に等しいものであり、また復活にあずかるゆえに、神の子でもあるので、もう死ぬことはあり得ないからである。 死人がよみがえることは、モーセも柴の篇で、主を『アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神』と呼んで、これを示した。 神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である。人はみな神に生きるものだからである」。

律法学者のうちのある人々が答えて言った、「先生、仰せのとおりです」。 彼らはそれ以上何もあえて問いかけようとしなかった。

ディボーションノート　２　　　2014年1月１３日―1８日

|  |
| --- |
| 1月13日(月)　詩篇８７篇  　「シオン」は「要害」という意味です。旧約聖書サムエル記下5章7節に「ダビデはシオンの要害を取った。これがダビデの町である。」と記録されています。その後、ソロモンがこの町の北の丘に神殿を建て、この丘がシオンの丘と呼ばれました。美しい丘、神が基(もとい)を置かれた丘、聖なる丘、神の住まい、と歌われ、やがてエルサレム全体の呼び名となりました。神の都シオンから諸民族が生まれたと、シオンを讃える詩篇87篇。その最後は、「歌う者も踊る者も共に言う。『わたしの源はすべてあなたの中にある』と。」(新共同訳)と結びます。諸国の民の生まれた源、泉はシオンにある。すべては神の創造によります。「万物は神からいで、神によって成り、神に帰するのである。栄光がとこしえに神にあるように、アァメン。」(ローマ11：36) |
| 1月14日(火)　詩篇８８篇  「マハラテ」は「踊り・笛・病気」の意味か？「レアノテ」は「答える・苦しめる」の意味？。どちらも良く分かりません。病か苦しみのどん底で呻(うめ)くような祈りがここにあります。陰府(よみ)・墓・暗い所・深い淵。これらが深刻な、ぎりぎりの瀕死の状態を示しています。神と人から遠ざけられ嫌われ、涙を流す目まで衰えてしまった。10節から14節を読み味わっているときに、この詩人と主イエスとが重なりました。みことばの戸が開いて、光が差し込んできました。10節で「死んだ者のために奇跡を行なわれるでしょうか」と神に訴えていますが、主イエスはその奇跡を3回なさいました。ナインの町のやもめの一人息子(ルカ7章)、会堂管理人ヤイロの一人娘(ルカ８章)、そしてマルタとマリヤの弟ラザロ(ヨハネ11章)。3人を死からよみがえらせて、家族にお返しになりました。あなたにできるでしょうか、と訴える祈りに、神の御子主イエスは、できる、と答えます。さらに陰府の底にまで下られ宣べ伝えられました(第１ペテロ3：19)。また14節の祈りこそ十字架の上で祈られた主の祈りそのものです。すべての人の罪のために、事実主は神に捨てられました。死で終わらず、主は三日目に復活され、この詩篇の限界を突き破り、わたしたちに永遠の命を与えて下さったのです。 |
| 1月15日(水)　詩篇８９篇  　長い詩篇です。鍵の言葉は二つ。「いつくしみ」と「まこと」です。前者は神の変わらない愛を示す「ヘセド」、後者は神の不変の真実を示す「エムーナー」です。神は徹底して無限の愛を注がれ、一貫して真実に向き合ってくださいます。序の部分で、神が選んだ者との契約が堅いことを賛美します。続く5－18節は捕囚以前の王国が確立していた時代を描き、神の「いつくしみとまこと」が喜びと栄光を与えると賛美します。19－37節でダビデとの契約に真実であられる神は、人の罪を罰しても、「いつくしみを取り去ることなく、まことに背くことはない」と約束されます。しかし38節から一変します。神に背き続けた南王国はバビロンによって滅ぼされ、捕囚の苦しみの中で神に救いと憐れみを求めています。信仰は神に向き合い礼拝し続けることに尽きます。神の愛と真実とを受けて、わたしたちはわたしたちの愛と真実でお答えします。この恵みへの応答は、主イエス・キリストによって始められ支えられています。 |
| 1月16日(木)　詩篇９０篇  　ここから第４巻で、90篇と91篇とは交読文に入っています。「人の子よ、帰れ」と神に呼び戻されることが死です。6節は鴨長明の「方丈記」に似ています。10節の言う「70年、健やかでも80年の骨折りと悩みの人生」という無常観に対し、92篇14節では「年老いてなお実を結び、いつも生気に満ち、青々として」いる晩年を語ります。人生の無常を歌う詩篇に見えますが、後半は違ってきます。人生の最後を悟らせ、知恵の心を得て生きられるようにしてくださいと祈ります。さらに大胆に「主よ、み心を変えてください」と祈り、「いつくしみをもって、世を終わるまで喜び楽しませて下さい」と願うのです。繰り返し「栄えさせて下さい」とも祈っています。人生の苦しみの中に神の怒りを感じつつも、それで押しつぶされて無常観に流れるのではなく、主イエスに信頼してわたしたちも、再度、大胆に神を呼べるのです。ここに恵みがあります。信仰は人を解放し、若くするのです。 |
| 1月17日(金)　詩篇９１篇  　信仰は神に守られていることを実感させます。「全能者の陰にやどる」とは絶対的な平安のなかに守られていることです。神の翼の下に避難して、あらゆる攻撃に対しても、神の大きな盾と小さな盾とが、家族全体と一人ひとりとを守ってくださる。これは全く神の恵みによります。自分たちへの当然の特権と自慢するなら、パリサイ人の罪を犯すことになります。サタンは荒野で11節を利用して、神の子の特権を使えと誘惑します。主イエスは、神を試みるな、と拒否します。そして主はその神の子の特権を用いることなく十字架に向かわれた。新聖歌99番。神の翼に守られて一日を終えられる恵みを静かに感謝しましょう。 |
| 1月18日(土)　詩篇９２篇  神を讃えることは良いことです。「良い」は旧約聖書のヘブル語では「トーブ」です。新共同訳は「いかに楽しいことでしょうか」と訳します。賛美することは神の御心にかない、わたしたちにとっても賛美ほど楽しいことはありません。信仰はわたしたちの口から愚痴や批判やつぶやきを消し、神をたたえる賛美を与えてくれます。神がどのような方なのか分かれば分かるほど、賛美は大きく広く深くなります。周りの状況が変化し、自分自身が老いて行き、できることが限られてきても、賛美は消えません。神は賛美し続ける人を栄えさせ、育て続けて下さいます。賛美する人は年老いて白髪になっても、なお実を結び、いつも命の生気に満ちあふれ、青々として、主の正しいことを賛美で示し続けます。 |